長谷川朋太郎氏　博士学位論文報告会

博士論文タイトル：« Totalité, sens et structure. Gilles Deleuze, de l'histoire de la philosophie à la philosophie structuraliste (1954-1969) »　（「全体性・意味・構造 ── ジル・ドゥルーズ、哲学史から構造主義の哲学へ（1954-1969）」）

日時：2025 年 9 月 2 日火曜日 16:00〜18:30
場所：東京大学駒場キャンパス・コラボレーションルーム３またはオンライン（下記リンク先または QR コードよりご登録ください）
https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/meeting/register/mbPgNlZfTkm1b37rRmeBbg

報告概要：フェリックス・ガタリとの共著によって構造主義批判の立場で知られるジル・ドゥルーズが、『差異と反復』（1968）や『意味の論理学』（1969）といった前期の主著においてはむしろ、構造主義に依拠しつつ自身の哲学を展開していたことが、近年の研究で明らかになっている。哲学史家としてキャリアをスタートさせたドゥルーズは、なぜ構造主義という哲学の外部を取り込むことによって、自らの哲学を築こうとしたのか。本報告会では、この問いに取り組んだ発表者の博士論文について、その概要を紹介する。1950-60 年代のドゥルーズの思索の中心には、全体性・意味・構造という三つの概念が一貫して存在する。構造主義に接近する以前のドゥルーズは、マルシャル・ゲルー、フェルディナン・アルキエ、ジャン・イポリットという三人の哲学史家の影響のもと、カントやベルクソンの読解を通じて、全体性・意味・構造（システム）の概念の刷新に取り組んでいた。こうした哲学史家としての仕事を背景としつつ、構造主義を新たに取り入れることによってドゥルーズは、1960 年代後半に独自の〈構造〉の哲学を打ち立てるに至ったのである。